世田谷村日記

石山修武

一月十二日

地下の連中に文句言うのは昨日で止めた。文句を言ってから何かが良くなる訳もなし。それなら言ってる時間が無駄になる。無駄な事はやるまい。エネルギーは消耗するばかりだし。

今年中に片付けたい事。

・ひろしまハウスプノンペンの本作り。

・磯崎新論

・開放系技術デザイン・ノート

ハードな本を幾つかまとめなくては。

作家論は今よりも年を取ったら書けない。重源論を途中まで書いて投げてしまったのは今でも心残りなのだが、アレは総合的な歴史学の素養がなければ書けなかった。

朝、馬場照道から電話あり、健さんの「生きる道の記録」の、死は闇の下りは絶対健が言う訳ネェと言う。ベーシーの菅原も坂田明もそんな事言ってたからね。あれはまずいよって。私もいくら健さんが弱っていても、言う筈は無いと思いたいのだが。死も又光というのも、ある意味では安直な救いであるかも知れない。生きても死んでも救いは無いさ。

十一時大学。野村と大阪北九州の件打ち合わせ。十三時佐藤。面白い形を生み出したな。十三時半鈴木。ようやくにして社会性の欠如に気付いたね。

日曜日の午後の陽光が研究室のブラインドから洩れてきて、なんだかうとうとしてしまう。ネパールのナワルコットを思い出すなぁ。峠の上の小さな集落。一本のピポリの木があってそこで旅人は皆休息をとる。ただただ休む。子供達がいて花が咲いていて、動物たちも休んでいる。何もしていない。遊んでいる。のんびりと、ゆったりと美しい。ヒマラヤの白い峰々が真近にあるが威圧的ではない。平穏である。フッと通り過ぎるのに、あれ程平穏な場所はない。十六時自民党婦人部会広報誌インタビュー。

一月十三日

十時地下安藤修士設計見る。ようやく自分の現実に対面してみようとはしてきてるかな。ガレージハウスのアイディア生まれる。スケッチする時間さえあれば何とかなるのだ。十四時森川光嶋聖徳寺打ち合わせ。夜、久し振りに雄大と飲む。奴も色々と考えてはいるんだ。

一月十四日

五時起き。五時半家内に送ってもらって羽田へ。七時半に着けば良いのに六時半前に着いてしまう。只今機中。今年初めての旅だな。旅と仕事の区分けもつかぬが、二月三月の超過密スケジュールを乗り切れるのかと思うが、マ、やってしまうしかないだろう。十一時に沖縄に着く予定。十一時那覇空港着。十四時名護市役所、岸本市長面会。だいぶん古くなったが名護市役所の建築は健在。象設計集団の良品であるな。十五時前名桜大学。キャンパスを案内していただき比嘉理事長と面談。十四時北部広域市町村圏事務組合訪問。名護より那覇に戻る。十八時過ハーバービューホテル着。流石に疲れた。ホテル内のレストランでイタメシ喰っ

て寝てしまう。夜中に起きて入浴、頭を洗う。こういう時間は嫌いではない。明日も目一杯のスケジュールだな。

一月十五日

七時四十分起床。ホテルからの朝の那覇市は雑然としたギリシャの小都市のような印象がある。白い箱が折り重なっている寂しい感じだ。平坦なところは米軍基地にとられてどうしても凸凹な起伏に富んだ地形に町が展開されているから、それも又ギリシャの山の地方都市の地勢と何となく似てしまうのだろう。白い箱が多いのはコンクリートの建築が多いからだ。第二次世界大戦で伝統的な町並みが破壊されたことからきている。沖縄では様々な事象が近代の歴史と密接な不即不離の関係を持っていることがすぐに理解できる。東京の表層の繁栄ですら、沖縄のこのような事実の陰画なのだ。戦争の酷薄さを感じざるを得ない。

十時国建地域計画部打ち合わせ。大方の私の沖縄計画のイメージを述べて、すり合わせ。昼食後十三時三〇分琉球大学へ。放送大学沖縄学習センター所長尚弘子先生訪問。ごあいさつ。ここで内閣府の方々と別れ、再び名護市へ。二日間内閣府の方々にはお世話になった。一応目的は達成した。国建スタッフに再び名護ブセナテラスまで送ってもらう。ブセナテラスで知人と会う。久志、豊原、辺野古地区を見る。久志の自然環境、町並みの保存状態に見るべきものがある。那覇空港まで送ってもらい十八時前空港着。十八時二〇分の羽田行きに駆け込む。富山からの飛行機が今月一杯羽田に機材廻しで飛んでいるらしく、タイムテーブルには載っていない。二日間良くタイトなスケジュールをこなした。二十二時過世田谷村に戻る。地下の様子を見て、倒れるように寝た。